

氏名(本籍)	もり さきのり かず 森 崎 巧 一 (兵庫県)
学位の種類	博 士 (デザイン学)
学位記番号	博 甲 第 3491 号
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	造形の印象評価とその特徴抽出

主 査	筑波大学教授	博士 (デザイン学)	原 田 昭
副 査	筑波大学教授		蓮 見 孝
副 査	筑波大学教授	博士 (芸術学)	五十殿 利 治
副 査	筑波大学助教授	博士 (デザイン学)	五十嵐 浩 也

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、鑑賞を従来の研究で扱われてきたような論理的な側面に限定せず感性的な側面を捉え、そして人の鑑賞行動が全感覚的な統合的能力によるものであることを、造形印象評価実験を通して検証しようとするものである。

造形印象を調べるにあたり、最も印象が顕著にあらわれると考えられる美術作品の鑑賞を調査の対象とした。鑑賞を対象にした研究は、主に芸術学分野・芸術教育学分野において進められており、芸術に関する広範な情報と共に蓄積されてきたが、鑑賞者の造形印象のような感性的な側面に対して科学的な調査と分析を行い、造形印象の特徴について客観的に論じられた研究事例は数少ないとしている。

論文構成は、序論、本論 9 章および結論からなる。

序論では、「鑑賞は人間の全感覚的な統合的能力による行動」であるという仮説を提案し、仮説検証のために視覚と触覚を取り上げて、鑑賞における造形印象の特徴について調査し、全感覚的な鑑賞行動の一端を明らかにすることを本研究の目的としている。

本研究における造形印象の特徴抽出とその評価には 2 つのアプローチがある。第 1 は、伝統的な視覚的印象評価手法をベースとし、言語的パラメータを用いて客観的に得られた数値データに定量的解析を行う事である。第 2 は、言語的な評価法とは異なる鑑賞行動から造形印象を捉えるアプローチである。すなわち触覚的鑑賞行動を時系列的データとして抽出し、その鑑賞データと造形印象の総合的評価を行うものである。

第 I 部第 1 章では、芸術鑑賞について語る文献から鑑賞の説明として頻繁に用いられる 42 語を抽出した。アンケート調査を行い、観賞用語を 4 つのグループ(教養的属性、評価的属性、認知的属性、感性的属性)に分類した。第 2 章では造形印象とは、人が造形に対してもったイメージに対する評価の結果であるとしている。そのような造形印象の評価について数値データを獲得し、定量的分析を行って、その特徴を把握することを本研究における造形印象の特徴抽出と定義している。第 3 章では、これからの鑑賞支援には理性的な情報以外にも鑑賞者の造形に対する感性的側面を支援する情報が必要であることが分かったとしている。そこで鑑賞者の感性的な造形印象を捉えるため、情報技術と定量的解析を駆使した印象の特徴抽出法を検討する必要があるとしている。

第Ⅱ部4章では、一般鑑賞者とエキスパートの2種の鑑賞者を設定し、両鑑賞者の造形から受けとる視覚的印象の差を定量的分析により明らかにする実験を行っている。実験から一般鑑賞者は感性的用語に反応を示し、エキスパートは論理的用語に反応を示す両鑑賞者の差異が確認できた。第5章では、論理的解説と作品画像、あるいは感性的解説と作品画像に対して鑑賞者が印象を容易に答えることのできるWebアンケートを制作し実験を行った。それにより得られたデータに数量化Ⅲ類と多次元尺度構成法の2種の多変量解析による分析を行い、両解説によって影響される造形印象の差を明らかにする実験である。その結果、論理的解説からは、情報を受動的に受けとめて印象を捉えようとしており、感性的解説からは、能動的に印象を受けとめようとしているものと推察できるとしている。

第Ⅲ部第7章では、触覚的な鑑賞行動を計測するためにセンサとなる金属を立体造形表面上に均等間隔で32箇所埋設した実験装置を独自に製作し、触察鑑賞行動の定量的な計測実験を行った。その結果、触察滞留時間、触察回数と造形形状との関係が読み取れた。第8章では、本計測装置を用いた実験により、「形の面白さ」の評価として触察滞留時間は有効ではないが、触察回数は有効性が認められたとしている。

結論：本研究は、視覚的造形の印象評価の調査を通して、鑑賞の感性的側面に対する言語的評価の有効性を確認し、さらに造形の触覚的印象評価の調査を通して、感性的側面が言語的に捉えられる部分の他に、言語では把握しきれていない感性的部分があることを触察鑑賞行動による評価によって示した。この実験により「鑑賞は全感覚的な統合的能力を働かせて造形を捉える行為である」ことを説明する手がかりが得られたとしている。

審査の結果の要旨

「鑑賞は人間の全感覚的な統合的能力による行動」とあるという仮説を提案し、仮説検証のために視覚と触覚を取り上げて、鑑賞における造形印象の特徴について調査し、全感覚的な鑑賞行動であることの一端を明らかにすることを本研究の目的としている。

特に視覚的な鑑賞行動ばかりでなく、触覚的な鑑賞行動を触察計測装置を独自に製作して実験検証したことは極めて独創的な点である。内容は、視点の独創性、研究方法、研究成果の全てにわたって、学位請求論文としての十分な水準に達している。検証に用いた多変量解析ならびに触察計測装置を独自開発して使いこなして検証を行った著者の努力と資質は大いに評価できる。この論文はデザイン評価という曖昧で主観的な概念を「鑑賞行動が全感覚的な統合的能力を働かせて造形を捉える行為である」という仮説の一端を視覚と触覚の2種類の鑑賞実験により明らかにして、デザイン学に新たな研究の視点を開示し、その有効性を考察した点で学術的意義は極めて大きい。このことはデザイン学の方法論に関わる独創的な業績であり、重要な貢献であるといえる。

本論文の主題は、造形の印象評価とその特徴抽出としているが、触察による鑑賞行動の実験はまだ限定された領域にとどまっておりデータ解析も充分とはいえない。今後の展開が待たれる。しかし、視覚領域に限定されたデザイン評価研究を触覚領域に広げた点はきわめて新鮮な着眼点であり、著者の研究のより実践的展開を期待したい。

よって、筆者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。